

くずのはの

伊 沢 玲 千 葉

タガログ語らしき大声飛び交ひて屋根葺き工事つづく歳晚
くずのはの裏工作が露顕して獄に眠れるカルロス・ゴーン
わたし今どのあたりかな初空につらなり浮ける雲のすごろく
生き急ぐつもりなけれど気が付けば全速力で歯を磨きをり
双六のあがりは来世だれもみないつかかならず上がれる来世

棒をさがしに

加 藤 和 子 千 葉

役所から「避難時支援者」ですと言ふ文書届きぬ鏡開きに
今、われは時間の富豪 日溜りで「避難時支援者」の書類とねむる
一生を棒に振ることしてみたし棒をさがしに潟に出で来つ
滔々と何に急かされ来る潮が行き止りなる谷津の干潟に
ボタンとドアしめて籠もれる寝室に白々と差す月のほひす

村上の鮭

豊 島 秀 範 千 葉

還暦となりし教へ子旧姓も添へて村上の氷頭なます届く
氷頭なます口に踊りぬ村上の三面川をのぼりたる鮭
居繰網漁にて捕れし鮭といふ三面川にこころも躍る
首つりを厭ひて尻尾を上吊る新潟村上の鮭の塩引き
切腹を避けて開ききらぬ腹 村上落人村の塩鮭



おなががすいた

石橋 千恵子 神奈川

十二月八日ぬくとき土を踏みおもひのほかの終ひ菊つむ
ころびたる痛みに耐へて踵にて背を泳がせて炬燵にねむる
いまはただ脊椎動物の類にゐて寝返りをうつすべを考ふ
木偶坊でくのぼうとなりて寝てゐしわが体目覚めたりけりおなががすいた
娘と枕ならべて眠る食洗機のおと潮鳴りのやうにききつつ

雲の島々

松下 菜水 神奈川

公孫樹の葉散りつくしたる並木道ブーツを履けばふかぶかと冬
メンチカツ揚げつつ思ふ憎しみの鮮度の保持には体力が要る
一束の賀状にまぎれジョーカーのごとく戻りてきたる一枚
わが部屋の鏡に鳥の影よぎる湖うみの水も融けはじめべし
杳とほき日の大陸移動を思はせて茜空ゆく雲の島々

新年となる

中村 敬子 東京

煩惱のひびきに鴉目覚めぬか 四か月後にかはる元号
真夜中に睨りだす蕎麦それまでの話とぎれて新年となる
賀状来ない父の最後の同級生 栗さんとんを父は欲しがる
おみくじの小吉more good than bad消極的な幸運を待つ
一年の古いぼんやりと影にのせ新年会の帰路のすずしさ

青いそら

齊藤淳子 長野

半額のさらに半値でブランドの鞆を買ひぬ パンツと冬晴れ
頭から飛び込んでみたい青いそら親子海豚がゆつたり泳ぐ
仰臥する人のやうなる雲が見え稜線のうへ空中浮遊す
娑婆の味まだまだ知らぬをさな子は蒸した南瓜の甘みを好む
用済みとなるのは早し手の甲のへ大事なメモが斑に消える

歳ひとつ

吉田美奈子 愛知

脱出口ならずや冬の夕空に大き月ぼんと浮かび出でたり
毛の帽の中に縮めし両耳が風のゆくへを追ひて息づく
さむかぜに向かひ歩みし夜のくだち両耳にまだ風音棲めり
初売りの人群れの中すれ違ふ亡き姪少しふつくらとして
朝より降りみ降らずみ歳ひとつわれに加へて冬日暮れたり

オーマイガー

森田治生 三重

仲間はずれそここにあり漢字でもわには魚偏たこは虫偏
「かこちがほ」など知らぬ児が西行をめぐりて「オーマイガー」と叫びぬ
僧正も大僧正も苦笑ひしてゐむ児らに坊主と呼ばれ
読み問題好きと言ふひと新春のテレビのクイズ（陸蓮根）に黙る
自動車もやつと名前に追ひつくか生まれて二百年ほどが経ち

明日に照準

中西正博 兵庫

ぼたん鍋食べに行きたしデッカンシヨ市名変はれる丹波篠山
一陽来復、友の呉れたるゆずの実をざんぶと入れて病む身温む
「大晦日愚なり元日なほ愚なり」子規を偲びて新年迎ふ
穏やかな新年なればうり坊らい群れて落ち葉に眠りてをらむ
若き日に遙かを撃てと言ひしわれ明日あした、明日に照準合はず

琥珀夕映

竹内みどり 鳥取

久慈の地に翼竜、恐竜棲まはせてメタセコイアの森ありしとぞ
虫呑みし樹脂が琥珀になるまでの曠劫くわうじつはるか思ひみがたし
蜜色の琥珀にひそむへ久慈琥珀利鎌虫リガマムシあはれ捕獲肢たたむ
あしたにもあしたがあると思はせる久慈の琥珀のなかの夕映え
ブローチの琥珀がいだく白亜紀の気泡とともに顧客をまはる

無限遠点

小沢まき* 広島

溪底たにぞこの風の静けさ思いおり畳に午後の耳を当てつつ
過去ばかり納める箆筒 開けるたび小さな風は生まれるけれど
雪だよと抽斗に朱の帯を見る声無く永遠に遊ぶ唐子を
嵯峨御流 その墨文字の勢いのごとく若かりし日の免許状
水道水飲み干すときは眼を開く無限遠点が見つかりそうで